

了
美
至
事

全



人自少而壯而老。歷年已久矣。
 其所由是而之焉。道亦遠矣。
 况方少之時。血氣未定。七情蔽
 於外。五官訶於內。知誘物化不
 亡。其正者幾希矣。自非賢父兄
 嚴師友。督責而誘之於乎。不難
 矣哉。古之人喻之。負重任而適

遠道豈不然乎。王川先生自壯
 到老備嘗諸艱。身亦多病。猶著
 述不倦。嘗撰自脩編三卷。凡大
 而細常彙倫。小而應事接物。人
 之所以為人之道。逐條分析其
 理。抱之遊關東諸州。聚徒講經。
 聽者從耳。然敬服父老。嘆曰。古之

抱道術者。我不得而見之矣。意
 應謂若人矣。又繼著一編。其意
 謂遺人以物。不若遺之以言之
 益於人心大也。所往執以代土
 物。凡人之子弟。由是而之焉。則
 不由父兄師友之誨。督而喻於
 入孝出弟。敦善行。起薄俗之義。

焉。則此書之裨益世教不可勝言也。

天保乙未春正月上元之日

江戸 綾瀬漁人粹撰



了々み至也

玉川小町雄八著

初生

尚書大誓言に人ハ惟萬物の靈としり。靈としハ神妙不可思議

ありをいふ。天地の間鳥獸蟲魚其數勝て計しるべし。雖も

人ハ貴き人あり。五體七竅具備五音を分ち。五色を知り。常の

理に通む。故に人ハ富貴とあり。貧賤とあり。推並て共ニ是ニ陰

陽五行の氣を受けて生る。大小異なり。雖も其氣ハ一あり。故に

人ハ人を愛むるを本とし。人の生る根元を尋ねる。父母子を

生んと欲して子生るるもの又遊べ子も亦出んと欲して出るるもの
 非べ無心の中に於て妙合を得て親となり子となるの大善縁を
 結ぶこれ天より生を降る所以なり。然らば我體を我體とせば
 して慎む我子を我子とせばして大切は養育を盡すべし。故に人々
 子生るれば神明より受くる理を推し有る難く思ひ苟且も
 疎末にせずよく取扱ふべし。故に古の人ハ人を愛して人を愛
 してをせんその惡し所るものハ罪は在て人ハ非ざる故に其罪を
 惡んで其人を惡まざる。よこれ其の罪を犯す心を謂ふて人
 體を謂ふ非も其人體ハ本天より受くる形あり。何ぞ是を惡

まんや心ハ形なきものよして善は感ずれば善をなす。惡は感ず
 ざる惡をなす。夫子の仰せらるる出入時なく其郷を知ること
 無きものハ心の謂と云ふ。この心人の胸中ハ在りて萬事を指
 揮するものあり。このあり私欲は誘う。罪を犯すものあり。
 故に其犯する罪をば惡めども其人體をば惡まざる。或人余は善
 しく罪を惡む。人を惡むも同じき。よ遊むや答て曰く。
 我れ禹王の罪人を視て涕泣せらるるものハ其心の罪を惡ん
 でなり。人體ハ天の造作ある。何ぞこれを惡まんや。愛するよま
 涕泣を垂れ給ふ。是其心欲は誘ひて罪を犯す。罪を犯すものハ

小兒五六歳の以よ及べば漸く又物心をあふ。故又親又乳母あるりの
 教ふるよふを附べし。小兒の時より。見たり聞たりするに或は是て心の
 體くまぬ。故よ小兒よ句て。虚言を告ぐべし。正直を以て告ぐべし。
 小兒ハ温柔よして。養ふてやふべし。養ふてんれば。收ふあり。又小兒を養ふ
 とに。言語を善よつよべし。又避るる言語を使ふべし。是其子を
 秘めよ。轉化の術あり。お平生ハ志向をそりて。死投よべし。しり
 ども。若親へ不孝。若へ不忠あるよ。又似るるし。われは。是ハいさし。おふべし。
 養へく教へ告ぐべし。小兒と小兒と啼合。啼合をまれば。其親或ハ
 親愛の僻ありて。彼まが子を叱り罵りて。我子をば。畏員として

叱るべし。今く心好ちぐひあり。我子の為を遠く思ふべし。其子ハ
 畏員を以て。恨もぐ。雖も。本理よ。逃されれば。後ハ小兒の害と
 ぬるべし。子の為を謀るば。唯家の是。遊を論せん。先ッ我が子を
 叱りて。彼まが子をバ責べし。然れども。匹夫の人情大抵人の子を
 責めて。我が子又罪ありし。大なる過あり

是は小兒の時より。漸く又養ふて。堅強氣象を變化し。く。
 柔弱の氣象とあり。ば。あれ其の若の一生の福分あり。老子曰く。
 柔弱ハ生の徒。堅強ハ死の徒と云り。いさし。いさし。ハ生てあるりの
 形體ハ。柔ありし。して。死するりの。形體ハ。堅きあり。け。及。死を以て

柔弱の徳あるも、堅強の損あることを知るべし。故又温厚ハ
 一生の寶あり。然りとすども、一切是非は拘るべし。柔弱の心を
 以て善く云ふは、其親の爲、君の爲あり。其身體を棄
 れ、又家業を務め、藝能を励む等の事、剛強
 の氣象を出して、人より劣るべし。恥べし。是柔弱斗りと云義は
 非ん。是れ剛を包であることを知るべし。

或人小兒死する者を見せることを忌んで視せぬ。甚心は曰く、
 死を見まば不浄と云。又亡霊の祟りあると云ふ。故又死者を
 遠ざけるなり。夫も死生ハ一なり。生るれば喜び、死すれば哀しむ。

死生ハ人の大なる事あり。豈かれを忽とせんや。死を忌む斯の如く
 せば不實薄情を教ゆふは、孔子仰せし如く、朋友の死して
 歸する所無かれ。我は於て殯せしむ。是聖人の死者を厚くな
 るる事。此は於て見るべし。古歌は、忌む心忌ぬる忌む。忌む
 り文字ハ己が心ありあり。又傳は曰く、妖ハ氣より由て起る。それ
 忌むも、妖怪も衆と苦に見るもの。是れ己一人として見、これ
 一人として忌む。己一人ハ私あり。衆あるハ公あり。己も彼も人
 として如くある。忌や、妖怪や、皆心の迷なり。君又事ハ
 心篤けれハ職分用して、心ある及ぶべし。

失ふ者あり。如何いかしく。善よくしてよく。其人必かならずに經書けいしよを好このむ。權けん謀ぼうの書しよ。又ハ詩文等しぶんとうの書しよの好このむ。聖經せいぎょうは拙くてそれを續つづく。質朴しつぱくの心こころなく。浮靡ふひの學がく子を嗜しむ故ゆゑあり。聖經せいぎょうハ身みを救すくふの書しよあり。今身いまみを失うつよ至いたるものハ本もとを棄すてまをさるる為ためあり。右七箇條みぎしちかんじょう。人の父母ふぼするもの。其の子こを教育きやういくせんと欲ほむ。終つひく心こころはなむ也なり。

十有五

夫そのを生なれむとにして。乃すなはちを知しるものを性せいの善よくある者ものと云いふ。これハ億萬人おくまんにんの中なか。一人ひとりも好このむとさや。所謂すゐせう堯舜二聖ぎょうしんにせいの好このむ。其その他ほかハ孔子こうしと雖いへも。生せい知ちハ水みづハ。學がく問もん修しゆ行ぎやうのようと。曉さまるなり。其その生せいれむとはして

知しるなり。性せいの善よくと。五倫ごりんの道理だうり也なり。自然じぜんと喻たとへるものを云いふ。學がく問もんの修しゆ行ぎやうもせびと。事ことハ物ものの道理だうり也なり。通つうと云いふ。何なにんと。舜帝しんていの己おのれを修しゆて人ひとは修しゆむ。又また舜問しんもんの事ことを好このむ。作つくらぬなり。孔子こうしの我われを生せいれむと知しるものは水みづハ。古ふるを好このむ。敏びんとて求もとむものはなりと作つくせらる。是こゝ堯舜ぎょうしんハ性せい多おほく。孔子こうしハ其その次つぎあり。然しかもも生せいまらぬと知しるなり。學がく問もんで知しるなり。困こんで知しるなり。是こゝを知しるなり。至いたるなり。子思子ししの語ごあり。其そのの是こゝを知しるなり。至いたるなり。一ひとありと作つくせらるなり。人ひとハ聖せい也なり。至いたるなり。欲ほむなり。聖せい也なり。至いたるなり。故ゆゑハ其そのの志こころハなり。

匹夫下賤（ひつふげせん）雖（なほ）一（ひと）如何（いか）やうも昇進（しやうしん）せむ。昇進（しやうしん）せむ。禄位（ろくゐ）
 を得る（とく）ことよ水（みづ）へ道（みち）よ昇進（しやうしん）せむとあり。道（みち）よ昇進（しやうしん）せむとあり。
 心の安寧（あんねい）を得る（とく）ことよ道（みち）をゆて而後（しかた）よ禄位（ろくゐ）をゆる
 ことゆるべしや。及（およ）ハ内（うち）あり。禄位（ろくゐ）ハ外（そと）あり。其（その）心安寧（あんねい）よして
 危殆（きがい）あるの本（もと）ハ孝悌（かうてい）あり。孝（かう）ハ親（おや）より。事（こと）つて親（おや）を一生
 忘（わす）まざるこ。悌（てい）ハ兄（あに）よ異順（いじゆん）よ。もあはぶよあり。或（ある）人（ひと）の
 云（い）く。心安寧（あんねい）を得る（とく）ことよ思（おも）ひ。貧（ひん）苦（く）よせむ。人（ひと）ハ耻（かた）
 めららむこと多く。思（おも）ひあるがう。親（おや）を疎（そ）う。如何（いか）がう。あ
 心の安寧（あんねい）を得る（とく）ことよ水（みづ）へ道（みち）よ昇進（しやうしん）せむとあり。道（みち）よ昇進（しやうしん）せむとあり。
 心の安寧（あんねい）を得る（とく）ことよ道（みち）をゆて而後（しかた）よ禄位（ろくゐ）をゆる
 ことゆるべしや。及（およ）ハ内（うち）あり。禄位（ろくゐ）ハ外（そと）あり。其（その）心安寧（あんねい）よして
 危殆（きがい）あるの本（もと）ハ孝悌（かうてい）あり。孝（かう）ハ親（おや）より。事（こと）つて親（おや）を一生
 忘（わす）まざるこ。悌（てい）ハ兄（あに）よ異順（いじゆん）よ。もあはぶよあり。或（ある）人（ひと）の
 云（い）く。心安寧（あんねい）を得る（とく）ことよ思（おも）ひ。貧（ひん）苦（く）よせむ。人（ひと）ハ耻（かた）
 めららむこと多く。思（おも）ひあるがう。親（おや）を疎（そ）う。如何（いか）がう。あ

吾身（われみ）を責（せ）む。第一（だいいち）朝（あ）早く紀（き）す。各職（かくしやく）分（ぶん）を稼（かせ）ぎ務（む）
 むべし。服（ふく）ハ弊（やぶ）するものよても。忍（しの）ばむんバあるべし。若（わか）し今
 子（こ）を養（やしな）ひ。又（また）女（め）を嫁（よめ）む。是（こゝろ）等（ら）のともは附（つ）て。衣服（いふく）
 あり。あぬバ。耻（かた）か。思（おも）ひ。氣（き）をけうて。人（ひと）よ金銀（きんぎん）を
 借（か）りて。支度（しど）をい。其（その）失費（しつひ）實（じつ）よ益（えき）あり。惟（ただ）正當（せいとう）なる
 者（もの）を選（せん）で婚娶（こんと）し。支度（しど）をい。飾（かざ）らむ。未（いま）々の事（こと）を考（かん）ふべ
 其（その）式日（しきじつ）の衣服（いふく）とも。人（ひと）の中（ちゆう）ハ出（で）られ。其（その）郷（きやう）の善人（ぜんじん）と交（か）り。不（ふ）善（ぜん）
 人（ひと）。懇意（こんい）よ交（か）り。右（みぎ）やうよ心得（こころえ）られ。豈（いか）安寧（あんねい）を

得て親より事ふるありざらんや。孝悌ハ譬ハ家乃
 基あり。基堅固なれば柱を立て棟を載て家動が堅固
 ありざれば家動て終に傾くに至る。故に立身も家も
 興るも皆孝悌より始まる。又白日賊を巧に贏利を取
 る。種々の舉動を致し。幸に其家豊饒に至るも。
 其の者の先後及んで心氣不同の病ひを受ふ。狂僻
 の患を得る。無事な終らば天道豈畏きざるや。
 けんや。予嘗て論語の書を篤く信じて讀とる。且
 晩学にして才拙なるや。道理を會得するところとし。

今年二十歳に及つ。其間中症の病を受け。稍痊と欲する
 や。又続けて種々の病を煩ひ。旅行に居て病を與ひ藥を
 携へ東西に奔走す。今や全快と云ふも遊されども。頗る本復せ
 豈天幸と遊とや。今夏房州館山に來りて逗留す。其郷の
 子弟來りて論語の一説を問ふ。予是を告て曰く。吾れ曾て
 四方の人を恩惠を受けると多し。今又この郷の人と交ふ。
 其の厚子と少のめぐみ。予に徳を報ひんと欲せれども。如何せん
 や。子弟の問ハ實に我が幸あり。此に於て孔子の十有五より
 聖に至らぬ。迄の記聞を寫して示す。子曰十有五而志于

學孔子年十五として。學に志ざるといへば。世間の人と同然よし
 て。別な技群の才ありと云ふ。非べ。され斯人と與ふも。非べ
 して。誰と共もうせん。と云ふ旨趣あり。學ハ詩書礼樂の文あり。
 孔子もこの文を素讀してより。漸々進んで上達す。今日の人を
 以て見まふ。始め素讀。其次ハ會讀。其次ハ講釋を聞き。又
 威儀作法等を學ぶの事。これ初學の業なり。志于學と
 云ふハ。大學本文挿注。知止と云ふ所。當きり。知止と云ふ。至善に
 止るべきなり。至善と云ふ。何ぞや。人の君となりて。仁と止る。仁ハ
 慈悲憐愍の心を以て。奴婢を使ふべしとあり。發句。初學名

彼も人の子。樽もろいといふ。人の臣となりて。敬と止まる。敬
 と云ふ。主人の命らぬ。通る。己の私智を加へ。大切又
 勤る。人を云ふ。人の子とありて。孝と止る。孝と云ふ。父母より
 よく事へ。父母の志と背ぐ。父母の間ハ偽りをせぬ。金
 錢遣取等。至るまで。匿さぬ。正直と云ふ。人の又とあり
 て。慈と止る。慈と云ふ。正道を以て。子を愛するを云ふ。子を養
 ふ。依怙なく。正しく。美を食せ。美服を著せる。
 このものを是と云ふ。大切の藝能をば。あらう。それと云ふ。これを
 姑息の愛と云ふ。國人と交ふ。信と止る。信と云ふ。偽りを

言ふぬともある。口より一たび言を出せば。命ふれ令告文のやうに堅く
 守ふべし。この仁敬孝慈信の五箇條ハ皆まか皆学よ由らざれば
 治まらぬ故又学ハ中道を知る所以あり。中乃ハ初はつ初の辨は辨
 也。礼義を立て。これを辨は辨べ。礼ハ物の次第あり。義ハ事の
 宜なり。この礼義を立て。事を治む。其治方ま方の規矩ハ
 礼義あり。傳説曰く。事古を師しとせむ。以て克世あを永く
 するといふ。説ま説が聞く所ところハ此也。惟学たで志を遂つと務つめしむ
 敏と敏れば其修そのふと乃来ま来ると。これ古人の人道を習まると
 仰おほふべし。

夫是婚娶ハ繼世けいせいの本。礼ハ男ハ年三十よりして娶めむ。女ハ二十よりして嫁
 するといふ。其通と急度守るべきことことも此也。是等これらの事ハ其の
 時の宜よきと後のちて行なふべし。其者そのものの父早く娶めむとと母
 死しば。其意い又後のちへへ。それそれも其身分身分の宜よき節せうあるべし。或ハ
 兄弟寡あはく親類疎うければ。子孫の為ためは早く娶めむべき時ときもある也。
 又其身上えんみの貧富厚薄かひより。三十以後いて娶めむべきものも
 あり。二十以前いて娶めむものもあり。何なにもその宜よきとと否いなきととん
 親おやの科簡かかんハ附つく。此こゝの宜よきを謀まふべし。其その後のちを必かなび致いたす
 處ところを致いたせば。跡あと度たとして嘆なげ乃なり。終つひに全ぜんふ

たるも能く其要する上ハ譬之ハ容貌美醜を拘らば唯々志
 操貞節の如何んとするなり。志操美しければ何を容貌の醜を
 以てせんや。生涯夫婦中善く親先祖より事するも心
 づくべきあり。俚諺云。人の顔より只ららと云く。詩云。葑菲
 采り葑菲を采る。下體を以てするも勿れ。葑菲ハ美菜也。
 下體ハ苦根あり。下體の食し難きを以て。并て葑菲の善
 を捨ふし勿れ。れ心を取て。貌を取らむ勿れと云ふ譬言あり。
 又牛ハ牛連。馬ハ馬連と。人の富貴の連あり。貧賤の連有。
 其等幾段もあふあり。其連を絨ざるやう致さざれば。けこと

小ありと云ふ。又以て大は譬言也。

三十

三十而立。々の廢の字の及あり。其の心道よちて。撓ざる
 意。言ハハ。富貴利達。淫聲美色の為。動搖せらる。
 其欲ハべきもの。を欲し。欲ハざるもの。を欲せざらん。其の正
 直よ。後して是別と。され其道のまろ所以也。
 夫子三十ふ及んで。此よ。其の修りの強し。外物を
 見て心の煩累自然く遠くけり。余考らる。富貴利達ハ。
 天下の福あり。こまこと教へ。避く。しつゝ。進んで。さる。

求りて其の道に於て行ふものあり。又大學に知止而后
有定論語の三十而立と云語の當り。定るといふ道に決定して
心の動るを云ふなり

四十

四十而不惑と云。智の明ありたる故に善悪邪正を分別
ありて。疑惑せざらん。これを判断するところ智者の惑の云
も是あり。其の惑と云ふは一朝の念つるも其の身と忘れて
以て其の親も及ぶとあるの類あり。又曰。既其の生を欲
又其死を欲し。是も惑あり。又乾の九四の爻の辞も或躍

又淵に在りともつるの或も疑ふありともつる心の字の上
或字を加ふ。これ惑の字なる。考ふべし。疑惑の心甚しけ
き。遂に心の本居と失つるに至る。其根元を尋ねるも苟且
の利欲の誘き已を知らずして。身を失つるも甚し。故に邪
欲は去るべし。正欲は去るべし。邪欲を去るべし。是非がみある。
是非見ゆれば疑惑自ら去る。大學に定而后能静ありと。
静と云ふ寡欲を云ふなり。礼の樂記も人生を静あるは天の
性ありと云ふなり。邪欲を去れば心自ら静あるべし。疑惑も去る
ことあり。余嘗て云ふ欲は二ツあり。正欲邪欲。邪を去るなり

正をとる。これと畧して言ふ。王法はありて、せんぎ 征稅ハ四公六民の取科あり。しゅうりく 六をを民（共）四をを公とある。商賣はありて、あきうし 一割或ハ二割半の利をとる。賣買は其の他此の類夥し。あひひ 是を正欲としふ。これ天下の王法四民の正利融通の常道あり。この及ぶ人ばあはる。邪欲はこれ又及ぶるあり。人よ對して語るべし。事とあり。贏利とありて。人の難儀を顧みんば。己まが為の謀ふ。是を邪欲とし。邪欲を貪む。一生の中。幸よ入刑を免る。豈天刑を逃さんや。天網恢々疎みして漏らざるあり。豈畏れんや。

五十

五十而知天命。天地自然の作附らるるものと天命と。この及ぶ吉凶禍福死生宛連の及ぶ。心の動揺せざるを。易よ曰く。天を樂しむ。命を知る。故よ憂へば。語よ曰く。死生命あり。富貴天よあり。又曰く。五十にして易を学ぶ。以て大なる過ちあるべし。五十八大衍の教あり。易ハ大凡人間界の事と説て。其道徳を究むる書。故よ吉凶禍福。貧富壽夭。万事天地自然として。人意の及ぶ所らば。逃ざる。理を示さるるものあり。故よ易を觀て。其の及ぶ理を極むる。

自づから心安穩あんゑんにして。其自然の理を樂よろこむ。故に夫子斯かの
 如く作られし。朱子曰く。人をもと盡つくして。天命よ其を格言かくげん
 かり。今人君子は非ざるより。天命を説とくべし。天命を易々やすし
 とみぬるものハ愚ぐの至りなり。孔子の聖せいにして。五十よりして
 始めて天命を知り。又五十以前の時。我は数年を加えて。
 五十よりして易と學まなび。以て大なる過あやまちあるべしと作らる。され
 其の天命の重おもきことを知る。豈容易やすと後あとづけんや。吾輩われらの如き
 一生人事じんじを為なさんと雖なほも。これより通曉つうきやくすることを得えずん。
 況いはや天命よ於おてあや。今天命を説とくし。且も。實まことは天命の

皮膚くわふの論ろんをさるるや。あるものよりして。耻ちづきの甚こしきなり。
 人々の大既おほいと説とくり。君は忠義。親は孝行。王法を堅かくもり。
 上うへを畏おそれ。下したを敗おれ。早はやに起おこして。各おの々おの其その職しやく業ぎやくを務とめ。儉けん約やく
 其その身みは限かぎりて。人を責せめむ。人の夫つまりをも責せめむ。其そのれれの人ひとハ。
 人事じんじ 難なんきを闕かぐ。其そのれれは難むづかしく。換か地ち等と用ようして。野鄙やび
 あるんをさる。それより其そのことごとく。毎ごとくの如ごとくあり。不ふ義ぎ
 人の敬けいして。其そのことごとく。彼かより。二百文の難むづか
 りの如ごとく。は方かたより。二百二十文の善よれ。其そのれれは。かゝるかるるん
 損えんをかけるか。ことある。是こゝろろは。各おの々おの其その職しやく業ぎやくを。且かつつ

何まの併なもも。何れの神もも。人の敬さるる事は。物をせんんの
何れのん。後は殺せんん。後は草の木の枝をとおくん。水
一盃火一炷をも。後は費さんん。これはのん事を論る
あり。い。それは水あり火あり。人は災害のん事は。何れを
費さんん。これを用て禦ぐべし。これは變ををさんん。方事
これを推して考べし。人は天令ハ。同物をれも。人事を
勤めて。修り成りて後は。もとり足るじや。我れもとあり
たる。あるを。天令をと知る。云ふ。
大學は。静よして而後能く安ん。天令をと知る。云ふ所は

何れ。安ん。古人曰く。これは安ん。天の如し。是れ
言ふ惡は惑ん。死生壽夭は。勤推せん。虚氣平ん有る也は。
人情世態自通曉さるを安ん。云ふあり。

六十

六十而耳順。順の字ハ逆の字の反なり。古書ハ金言耳
又逆は。是を以て。順の字の義理を考知す。金
言耳ハ逆は。人の言を身ハ耳ハ突つて面白くなる
云ふ義あり。何れ耳順ハ。耳は終つて。さあるを義
なり。夫子是れ水毀舉を聞て。心動さるのハ。天令を

無疆

夫も天地の高下。東西南北。高大無邊。其の理疆
 あり。よく其の推せば。萬物自然より有り難
 く。を察みべし。荀子の所謂天地の始り。今日
 是ありし。稍るれ。近し。百歳を上壽とし。八十を
 中壽とし。六十を下壽とし。これハ生命存する
 中の論あり。昔し武内たけのうちのの大臣三百六十歳よりして
 薨かうせし。大徳の人あり。三浦大助百六歳の壽を
 保る。有名の人あり。其餘百歳を過るもの少し。

無徳よりして長壽を得るもの。愚よりして。小兒の如
 かるものよりして。青黄赤白黒の色いろも辨わぜざる。其の
 事なれば。實よき用の人とん。然れども。この壽を
 得るもの。天あり。豈これを不敬ぶけいべけんや。況や其の
 子孫こそんたるもの。よ於てをや。是を敬し。是を愛し。
 保養ほくやう怠おこるべし。夫も百穀の終り。實熟じつじよくする
 を以て用とん。樹木の終り。棟梁とうりやうを以て用とん。
 皆其の終り。至りてハ。各材用をなせり。故よ人
 其の美いを稱あやむ。人ハ萬物の靈たまをれ。漸かく老おいに至り

てハ益用又立べきを今愚よ返るものハ何ぞや。今これ正欲を去て邪欲を貪るが為なり。孔夫子七十三歳より没し、今日に至るまで大凡三千餘年及びぶ。其徳まことに盛んよく其道遠く弘まる。故に夫子の道又由るともふ。匹夫も身を立て、王公も國を安んずること必せり。是も万古無疆の道なり。

性善

性ハ生まれつきと訓べ。天より受くる所をさし、

是を細言ハ性中ニツあり。性善ハ性のあるを云ふ。性之情を多くバ。飲食を嗜む。女色を好む。是あり。性の形ちを云ハ。バ。刃の長短。色の黑白。是あり。また天地自然よ受けたるもの也。性も孟子性ハ善あり。仰せらるハ。即ち天の告らるると同断なり。人よ善あり。不善あり。其不善を去るものハ。性の罪もあらむ。其の者。邪欲よ誘き、善を反。困窮も迫りて道を失ふ。これ全ハ。性も無き也。あり。性もあらず。惡事をせざることを知る也。

善を善くし。惡を惡くし。天下の人情あり。多し。惡人あり。其の子を養ふ。その子をば。我より勝る。惡人又致さんと欲するものあり。正當の子又致さんと欲し。これ已き惡をなさず。其の惡をさし。惡くあり。惡を惡むの心ハ善あり。是も不善有ることあり。又其の子をば。預けんと欲すれば。その心を撰んで。善人と思ふもの。預くるあり。まてこれ性の善すること知るべし。又人の生る。本を考へる。神代の卷。二柱の

神。始りて男女交合の道。を立たしむるとき。善哉と唱へし。これより人生る。豈惟人物の。善哉とよりして生るものありんや。禽獸。魚。至るまで。皆子の生る始り。彼の善哉の氣を起し。それ善哉と。善の至り性の本あり。深く考ふべし。これよりして。一切皆擴充すれば。天地の間。目よ視耳よ觸る。一切皆善くし。不善あり。奈何とすれば。天地ハ恒久あり。恒久ハ善あり。故よ堯舜の善。千百歳の人の軌範となる。桀紂の悪。彼も一代の中。人比

これを知くむ。あのきもさうりる。亦これを知くむ。
 人の知くむ者ハ。恒久ニ非ズ。人の欲するものハ恒久
 有り。夫も高者ハ天。卑者ハ地と判して云ふといへ
 ども。合して云へば一氣あり。繫辭云。元ハ君の長あり。
 元仁心此の三字。字畫皆二人と書く。此の三字其の
 指し所又より。小異ありと雖ども。皆性より湧
 出ス。然るべ則ち天地の事ハ。大君として。不君あり
 ことありと云ふべし。

天地正大

夫れ天地ハ正大として。五星二十八宿。晝夜天を回繞
 して。其纏次差り。一年三百六十日の中。四時寒燠
 推遷。條舒の小不同ありと雖ども。一年の終り
 綱紀する所に至りて。其の曆日ハ毫釐も違はざる
 こと。仰ぎ觀ふべし。其差りざるもの。天地自然の
 理あり。人ハ其の間ニ生る。これ其の自然の理ニ從ふ
 べし。自然の理ハ。正直を本とし。又母ニ事し。邪欲
 を貪むべし。これ又違ふ。其終り及んで。丁壯の時と
 異なり。蠢々たる狂愚となるべし。豈これを戒しん

ざんや。又天地の間。億々方々の人。男多くして
女少く。女多くして男少く。このつらぬ非べ。自然の
男女等分よけれ。各其の配合をなして。生々化々
して。世を繕ぐこと。豈に神妙不可思議なるべや。

つらみ屋中終

於人之得喪我徵之於其所。於人之善否我驗之於其所。
交余之論。世常持以為法矣。聞南總有大多和生者。嘗至
川先生之智。者久矣。其人敦篤。為一鄉之望。官吏之行。茲土
也。有問於生曰。汝於玉川先生在弟子之列。子白否。然則其
遇之厚。且敬如此。何也。曰。先生為人。正直不華。其接人。必
必信。苟有過。誤莫知。而不匡者矣。其言諄々。雖妄誕
不思者。亦不自知其遷善也。是以每見先生。未嘗無益
也。故雖未學一字。一文。抑亦得不師而出。予吏曰。余亦聞

其為人今於子言益起敬於是又重知先生德義之
 及人之深遠矣嗚呼余續先世之業十有五世先世戒
 子孫曰慎獨必及隱微之中戒殺及羽毛之微余資性
 天殺不能奉祖訓有慚焉予中先生幸以道屢
 喻而祖先之遺訓因以有輝光今茲正月斯編告
 成乃知斯書一顯于世則山野虫々之氓亦有所憚
 為惡矣乎乃欣然書其後益記其喜也

天保乙未春正月下總大田雙齋加瀬良長謹識



玉川先生往著自脩編三卷布于世遐陬細民因以知所嚮矣
 先生仁慈之心尚且不能已矣今又著斯編其必效于斯世固
 不待余言矣嗚呼如先生不帝騰之其其於平生亦如斯往
 年余兒三歲時取凡上唐詩選問余曰是何書也余曰是
 乃爺所讀大學者也汝及明年當使之讀也時先生
 在側曰兒童不可欺也事必宜告之以實先人者為至
 不可不慎其初也余嘆服請罪遂及鬼神之事先生曰詩
 有思成字比二字善形容鬼神之妙能思系者必有恍然得

者焉矣。余曰對鬼神默而拜歎言而拜歎。先生曰言而拜之。夫鬼神精誠之會中道之極。四時由以行焉。百物由以生焉。余則欲細大取法於此。以得其中道者而已矣。非毫有頗僻之心。而其中者。故對鬼神必告曰。願脩己治人。合於中道。其此而已。嗚呼先生平日一言一動。規矩必從。是以來則喜。去則慕。古之所謂永終譽者。其在於先生乎。世之讀斯編者。其體審所覈。知余言之不妄矣。

天保乙未春正月房州館山椒堂千葉知止謹識



玉川先生遊歷于房總二列而訪予草堂。故與聽經義。依先生之教導。聊似有得其要領也。然從事于稼穡。不暇寧居。何得極其蘊奧乎。先生固以實學教導世人。於其所著述。以國字詳釋修身齊家治國平天下之道。讀之者覺

悟良心在于己。遂勸善懲惡
之意漸起焉。嗚呼先生
此舉也。擴充之則知法然養
氣之術。不可求于外。乃可謂
之裨益于己不少矣。

天保五年甲午十有一月

北總飯倉山崎嘉輔誌



江戸樂舎用

